

## 在日華僑社会の文化的変動と血縁・地縁紐帯の拡大 —神戸在住の福清出身華僑の事例を中心に—

The Social and Cultural Changes of the Chinese Community in Japan and the Reinforcement of the Kinship and Locality Ties: Through An Analysis on Fuqing People Living in Kobe

張 玉玲

キーワード：福清華僑、血縁地縁紐帯、福建同郷会、同人聯誼会、出身地文化

### 概要

20 世紀 80 年代以後、移居到日本の所謂“新华侨”，不仅出身地区多样化，而且在成长背景，价值观等各个方面也与第二次世界大战之前来日本的老华侨大相径庭，因此整体来说新老华侨之间并没有形成一个水乳交融的亲密关系。其中，从福建省北部福清地区移居兵库县的新华侨近年通过协助老华侨举办其重要的传统文化普度，开始互相沟通，神戸の福建同郷会の組織規模由于这些新华侨の参入而得以保持往年的規模。

在其他地区老华侨社会接班人严重不足，新华侨却又另竖旗帜的情况下，神戸地区的新老华侨为何会开始互相交融？本論文首先整理福清籍新老华侨の移居及定居过程及现状，接着通过分析新华侨的同郷团体同人聯誼会的主要成员对于出身地文化信仰の归属意识以及与老华侨社会的血縁（姻縁）关系，论述新华侨协助老华侨举办普度の偶然性及必然性。作为福清人的文化认同的一部分而有意识地继承下来的血縁及地縁紐帯，由于新华侨の参入得以发扬扩大，而此紐帯又与其对于出身地文化（母文化）の归属意识互为前提互相影响。

### はじめに

1980 年代以降、留学、研修などの名目で来日する中国人が急増している（平成 24 年末現在、652555 人<sup>1</sup>）。その中でも、永住者とその家族、日本人配偶者などの滞在資格を持つもの、そして日本国籍を取得する者が年々増加し<sup>2</sup>、来日新華僑（華人）<sup>3</sup>の日本社会での強い定住傾向を示している。相互扶助のために集中的に居住した結果、チャイナタウンを形成するような老華僑の居住パターンと異なり、新華僑は「分散型」の居住形態をなしているのが特徴であるとよく指摘されるが、居住地域を見れば、新華僑の半数以上が、経済的にも、文化的にも栄えている東京や横浜に代表される首都圏や、大阪、神戸を中心とする関西地域に集中している。つまり、老華僑と「共生」しているのである。とはいえ、ともに

<sup>1</sup> 『在留外国人統計』平成 25 年版より、なお平成 25 年度版より、これまで「中国」に含まれていた「台湾」の出身者は、単独に統計されることになった。ちなみに、平成 24 年度末の台湾出身者は 22773 人であった。

<sup>2</sup> 平成 24 年度末現在の永住者と永住者の配偶者、日本人配偶者と定住者は、合計 27 万人を超えており、また、日本国籍の帰化者も毎年約 5000 人のペースで増えている。

<sup>3</sup> 1980 年代以降に来日した中国人のことを、戦前のそれと区別して「新華僑」と呼称してきた。しかし、日清戦争以降「日本人」となり、戦後「中華民国」の身分を回復した台湾出身の華僑もしばらくの間「新華僑」と呼ばれていたように、「新華僑」、「老華僑」という呼称はあくまで相対的な概念であり、明確な定義をすることは困難である。本稿では、来日の時期が異なる福清出身の華僑が歩み寄りあう諸要因とプロセスをそれぞれの角度から議論し、在日華僑社会をより立体的に捉えるために、便宜上「新華僑」と「老華僑」を使うことにしている。

「在日中国人」の枠組みで論じられることの多い新華僑と老華僑は、実際のところ、現時点では、互いを受け入れて、それぞれのニーズと問題点を解決していくような状況になっているとは決していえない。両者の間には、人生設計や価値観などにおいて大きな差異があり、相互理解が不足しているためと考えられる。例えば、老華僑社会は、(中国での)出身地ごとに結束を固めて祖先から伝わってきた文化を継承すべく、「故郷」に基づく地縁的、血縁的紐帯を依然として「伝統」のように重要視している(張 2014)が、新しい中国に生まれ育ち、教育などを通して強い国民意識を持つ新華僑からすれば、老華僑はかなり「日本的」で、その「中華文化」も故郷のそれとはかなり大きくかけ離れている。一方、越境ビジネスのために躊躇なく日本国籍を取得したり、積極的に日本文化も吸収しようとする新華僑は、三代目でようやく帰化を決意するという老華僑からすると私利私欲が強く、やや軽薄な印象を受けているように思われる。

こうした状況の中、近年、神戸に在住する福清出身の新華僑が積極的に老華僑の伝統行事の一つ「普度」に協力したり、福建同郷会に入会するなど、両者が歩み寄る新たな動きが出てきている。両者が歩みよる背景及びそれを可能にした要因は何か、福清出身の老華僑と新華僑の相違点及び接点は、どこにあるのか。そして、福清華僑の団体とその文化の継承は今後どう変わるか。本稿では、これらの問題について究明することによって、在日華僑全体の現状をより立体的に捉え、その今後を捉える際の重要な手がかりを得ることを目的とする。

福清出身の老華僑に関する研究は、これまで許淑真(1989)や茅原圭子・森栗茂一(1989)、張国楽(2010)など、呉服行商人として日本で新天地を開いた一世華僑に焦点をあて、地縁、血縁的紐帯によるネットワークの構築についての考察はあった。また、日本生まれの二世については、彼らがナショナルアイデンティティの構築の際に、一世が維持してきた地縁紐帯を「福清人」の伝統として受け継いだと説いた張玉玲(2014)の論考はある。新華僑については、出国ルートが大いに老華僑に関連していることや出身地がかつての僑郷であることから、福清華僑によるトランスナショナルなネットワークや僑郷の変化などに焦点をあてた論考が少なくはない。小木裕文(2001、2015)や山下清海(2010、2014)などがこの類である。これらの研究を通して、アジアのみでなく、ヨーロッパやアメリカなど福清出身華僑の移住先と故郷を結ぶ広範なネットワークが広がりを持ちながら機能していること、また、新、老華僑をともに送出した福清の「僑郷」に見られる、新華僑の投資や帰国建設などによる大きな変容ぶりなど、新華僑ネットワークや故郷との関係もうかがうことができる。しかし一方で、新華僑が発生した1980年代から30年以上の月日がたち、すでに移住先に根を下ろしつつある現在、彼らと現地住民および老華僑やその他の民族・文化集団との相互作用、エスニシティなどについて十分に考察されていないのが現状である。

以上の先行研究を踏まえ、本稿ではまず、神戸に在住する福清出身華僑に焦点をあて、老華僑社会の変遷および現況を整理・分析する。のちに、新華僑の来日及び定住の経緯を検討した上で、新華僑団体の一つである「同人聯誼会」が老華僑の伝統行事である普度にかかわり、老華僑社会に接近した経緯について分析することによって、血縁、地縁紐帯が新老華僑を個人レベルと集団レベルの両方からつなげ、出身地文化の維持、継承に機能するという今日の役割について考察する。

なお、本稿は2014年2月から継続的に神戸在住の福清出身華僑を対象としたフィールドワークで得たデータに基づいて記したものである。主な方法として、福建同郷会が発行する雑誌などの一次資料以外、福清華僑による普度や新年会など主要なイベントに参加し、参与観察を行い、また、関係者に対し、面談や電話インタビュー、そしてアンケート調査を行った。神戸福建同郷会や同人聯誼会の多くの方々に、資料提供のみならずインタビューやアンケート調査などにご協力いただいた。普度などの重要行事の際にも、ご多忙の中にもかかわらず、調査者である筆者に様々な便宜を図っていただいた。一人一人お名前を挙げるができないが、この場を借りて深く御礼を申し上げたい。

## 1. 福清人による日本への移住・定住

### (1) 一世の呉服行商人

日本における福清出身者による呉服行商は、長崎貿易時代の福清出身船員による個人貿易を基点とする(許 1989)が、福清出身者が大挙来日し、日本全国に広まったのは、1899年以降<sup>4</sup>のことであり、さらに福清で自然災害が頻繁に起きた<sup>5</sup>1930年代に、そのピークに達した。1920年、呉服行商人は836人であったが、1929年にはその4倍近くの3243人になった。1931年満州事変後、一部の引揚者もあったが、戦況が落ち着くと、再び来日し、日中戦争が勃発する前の1936年には、すでに2747人にまで回復した。また、戦争拡大に対する心配から、中国にいる家族を呼び寄せ、家族で一緒に暮らすものが増加した。1900年の在日中国人口の男女比は100:27.7だったが、1938年には、100:43.2となった(張国楽 2010:19)。

福清から行商人として来日した華僑は、特に自然環境が劣悪で貧しい高山、東瀚、三山などの地域に集中していた。彼らは、同郷、同族のついでで来日した後、まず親戚や同郷者のところで寝泊まりしながら、数か月から一年にかけて、先輩について行商に出かけて基本的な要領を覚える。のちに、独立して、先輩のテリトリーを侵さぬよう別の地域で得意先を作り、行商する。そこで基盤が出来上がると、さらに多くの同郷・同族のものを福清から呼び寄せる。こうした循環の中で、福清出身者による行商の足跡は、奥地へ奥地へと全国津々浦々に広がり、分散居住という特殊な分布形態になった。

### (2) 福清出身華僑による団体及びその活動

福清出身華僑による同郷(同業)団体は、居住の分散化と弱い経済力がために、他地域出身の華僑と比べ、結成が遅かった。1899年、華僑の歴史が長い長崎では、内地雑居令の発布で急増する福清同郷に対応すべく、福州幫を中心とする三山公所が成立した。当時の

---

<sup>4</sup> 1853年日米通商修好条約の締結以降、広東や上海、厦門などの福建南部から多くの中国人は貿易商やコックなどの職人として来日したが、貧困者の多い福清出身者は、資本金が殆ど不要な行商についた。1899年の内地雑居令が発布されるまで、横浜、神戸など開港場以外の、外国人による内地への進出は許されていなかったため、行商人の数が少なかった。1899年、明治政府はいわゆる内地雑居令である勅令352号及びその施行細則の内務省令42号を発令し、外国人居留地を撤廃し、外国人の内地への進出を許可した。単純労働者の内地への進出および新たな入国を禁止したが、行商人は、禁止の対象とはならなかった(詳細は、許 1989をご参照)

<sup>5</sup> 『福清市志』の記載によれば、1930年には台風、31年に干ばつ、32年に天然痘、35年風災、37年にペストが起きていた。(福清市志編纂委員会・福清市委党史研究室編 1994:38-39、129)

会員は 300 人に上った。大阪では、1906 年に呉服行商人が所属する福州幫が旅日華僑福邑公所を成立した。会員は 70 名であった。東京の福建華僑は、1924 年に親睦を目的に福建同郷会を成立した。1931 年には、横浜と東京の福建華僑は福建京浜聯合会を成立した（日本華僑華人研究会 2004：521）。1924 年、京都華僑は 100 名の会員からなる中華民國福州同郷会京都本部を設立した。神戸の福州幫華僑は、1935 年に旅日兵庫華商綢業公会（現神戸福建同郷会前身）を成立した。会員は 30 名である（内田直作 1949：321）。これらの団体の会員は殆ど呉服行商を生業とする福清出身者であった。これらの同郷・同業団体は、同郷（同業）者間の相互扶助以外、普度の開催など出身地文化の維持にも大きく寄与した。例えば長崎の三山公所は、1629 年に福州幫の船主らが貿易の安全を願い建立した崇福寺の維持及び当寺で行われる各種の祭祀活動の執行を重要な職能としており、今日も普度（中国盆）を含む崇福寺の各種の祭祀を担っている。神戸や京都における福州幫団体も後に同郷会に発展し、長崎同様、普度などの主な担い手となっている。

また、共通の言語、信仰などの出身地文化に基づき、福清華僑は同郷者間の通婚にもこだわり、同郷者の繋がりを通じて、子女の結婚相手を見つけ、決定するのが一般的であった<sup>6</sup>。こうした姻戚関係によって、同郷紐帯は一層拡大し、強化されていき、疑似的な村落共同体を形成したように思われる。その中で、普度に代表される出身地文化の維持、継承の場は、単に彼らの信仰心を表す空間のみでなく、華僑同士の同族、同郷関係の親疎を確認したり、そこで新たな（姻戚）関係を紡ぎ出す機会も提供していたのである。したがって、全国分散居住という状況にあったからこそ、福清華僑は一層同郷、同族の連帯感を強め、共通の出身地文化の維持を通じて、維持し強化してきた。

## 2. 戦後の同郷団体の組織化と文化継承

### （1）神戸福建同郷会と旅日福建同郷懇親会

日中戦争勃発後、日本当局は、中国各地で作られた日本の傀儡政権および日本政府の関連政策を在日華僑に支持させ、また、各地の在日華僑を統一管理・監視するための統合政策を実施した結果、各地の同郷・同業団体はやむを得ず解散した（中華会館 2013：201-208）。

戦後、民族意識が高揚する中で、留学生運動とともに展開された華僑運動に福清出身の若者も加わることで、中国人、および福清人としての意識を獲得した（張玉玲 2014：34-35）。1950 年代前後同郷会は各地で復活し、より活発で広範囲での活動を展開した。

神戸では、戦後の混乱期に闇市が横行し、各種の資材が商品として取引された。華僑はそれを絶好の商機ととらえ、商売に取りかかった。呉服行商を続けてきた福清出身者も、同郷、同族の繋がりを頼りに、四国や中国地方などの農山村から神戸やその周辺の地域に集まり、衣料品や料理、パチンコ、不動産など多様な業種につくようになり、経済力も徐々に強くなっていった。1952 年頃、戦前にあった旅日兵庫華商綢業公会を母体に設立された神戸福建同郷会は、神戸市から前神戸市所有中山手診療所を譲り受け、それを会館とした。以来、活発な活動を展開した。1972 年、「社団法人福建同郷会」として登録したのを機

<sup>6</sup> 華僑の通婚に関しては、過放 1999 に詳しい。実際、福清華僑に対する聞き取り調査を行う際、北海道在住の A は神戸在住の B の親戚であり、同時に熊本在住の C の妻の親戚であるような姻戚関係はよくある。

に、福建出身者を援助し、地域社会の福祉の改善を図り、また普度を実施し、華僑の道徳心の向上を図ることを正式に会の方針とした。

一方、1961年、同郷者の交流を深めるために、京都や神戸在住の福清華僑が中心となって全国的同郷親睦団体、「旅日福建同郷懇親会」（以下「同郷懇親会」）を設立した。同郷懇親会の成立目的は、①同郷者の団結の増進、②同郷者の相互認識や友誼を深めること、③同郷者の経済活動の提携と経済的地位の向上、④就職・職業、教育、結婚などの問題解決と後継者問題の対応などであった。1961年9月15～17日の三日間、京都市霊山新温泉で旅日福建同郷懇親会の第一回大会が開催され、60人ほど参加した。以降、毎年各地で大会を行い、会員間の親睦を深めてきた。1984年には初めて故郷福州での開催を実現し、420人の参加者を集めた。（旅日福建同郷懇親会半世紀の歩み編集委員会 2013）

福清華僑の全国的組織同郷懇親会の設立は、終戦を機に、経済的、社会的地位が向上した福清華僑の変化を如実に表している。戦後、同郷、同族の伝手で、都会に移住し、飲食店経営や衣料品販売、不動産経営などで財を成したものが多かった。経済力の向上は、彼らの華僑社会での地位を向上させたのみでなく、それまで顧みることのできなかつた子女の民族教育や伝統の継承など福清人または中国人としての民族的、文化的アイデンティティの確立にかかわる課題への関心も高めたのである。

1980年代以降、日本社会が徐々に異文化・民族に寛容的になり、老華僑社会自身も世代交代をする中、華僑社会離れが進んでいる。そのため、日本各地の、老華僑が中心となっている同郷会、華僑総会などの組織、団体のほとんどが後継者不足に悩んでいる。神戸福建同郷会もその一つであった。1982年、老華僑世帯の会員数は135世帯（兵庫県姫路市と群部地区も合わせれば194世帯）、1998年には132世帯であったのが、2015年2月現在では、104世帯と減少している。ただ、ここ数年、38世帯の新華僑を会員として迎え、全体的に142世帯<sup>7</sup>と30年前の水準を保っており、新華僑の吸収に成功した唯一の老華僑同郷団体と言われている。その要因については、次章で新たに来日した華僑に焦点をあてて考察する。

## （2）普度とその変容

普度とは何か。なぜ、福清華僑はこれまで普度を重要視してきたのか。

本来福清で行われていた普度は、挙行の時期こそ秋が多いが、その性質は、泉州や台湾などで旧暦7月15日前後に行われる「中元節」や「鬼節」と同様である。即ち、不慮の死を遂げて「この世」に恨みを抱いている幽霊や子孫が途絶えて無縁仏のまま地獄に呻吟している幽魂が現世の人間に祟りをしないよう、これらを鎮撫するために、衣食などを与え、道教や仏教などの供養を行うもの<sup>8</sup>であった。虫害や干ばつ、伝染病など、人間の力ではど

うにもならない天災は、「孤魂」や「厲鬼<sup>らいき</sup>」の祟りによるものだと考えられてきたのである。

農業や漁業を主な生業とする福清地方では、人々の生活は常に劣悪な自然条件におびやか

<sup>7</sup> 1982年と1998年の福建同郷会員数については、それぞれ『旅日福建同郷会二十年の歩み』（1982年発行）と『神戸福建同郷家族名簿』（1998年発行）を参照した。2015年のデータは、神戸福建同郷会魏浩順のご教示による。

<sup>8</sup> 王良清氏のご教示のほか、（渡辺欣雄 1991）、（潘宏立 2002）などを参照。

されていた。そのため、村や一族を挙げて普度を盛大に行うことで、祖先や神々に加護を求めるとともに、孤魂や厲鬼などの祟りを最大限に避けようとした。五穀豊穰や厄除けを祈願する重要な祭祀だったのである。若い頃から伯父に紙細工を習った王良清（1952年生）によれば、中華人民共和国が成立する以前、複数の村による共同出資でたびたび普度が行われていたという<sup>9</sup>。ちなみに、「普度」を「無事にそして効果のある大会に終わるように」という願いを込めて、「普度勝会」と称されるが、本来は「普度法会」またはその略である「普度」で呼ぶのが一般的である。

日本では現在、主に京都、神戸、長崎の三か所で、福清出身者中心の団体によって普度法会が継承されてきた。長崎では、1899年に成立した三山公所によって、普度が崇福寺で行われるようになり、しばらくの間、普度のために、多くの華僑が毎年長崎に集まっていた。1920年代以降、福清華僑の来日がピークを迎え、長崎以外の地域での増加が著しくなったなか、1924年に大阪と神戸の華僑が連合して大阪天王寺清寿院で、1930年より京都の華僑は京都の宇治萬福寺で、そして神戸華僑は1934年より中華義荘（二回目以降は関帝廟）で普度を行うようになった（中華会館 2013：341）。しかし、普度は異郷で伝承される過程において、資材調達の困難さや紙師などの専門職人の欠如、それに日本文化からの影響を受けて、大きく変容した。

例えば、「普度」についての説明は、京都の宇治萬福寺の公式ウェブサイトによれば、宗派や家系、有縁無縁などを問わず、三界万霊とすべての精霊を供養することにより、人間は厄病などの災禍から免れ、現世での利益を果たすものとされている<sup>10</sup>。つまり、今日の普度では、「孤魂」（無縁仏）のみならず、自分の祖先や家族（有縁仏）も供養の対象と変わったのである。実際、京都と神戸の普度の開催期間中、祭場の目立つところに、亡くなった家族に送る冥宅がずらりと並ぶ。ではなぜ、在日華僑は普度で祖先も供養するようになったのか。まずは、祖先供養の行事としての日本のお盆（盂蘭盆）の影響が大きいものと考えられる。そしてそれは、華僑自身が異文化へ適応した結果でもある。特に戦後、家族が亡くなった場合、華僑は日本の業者に葬儀を依頼し、日本式の葬式を行う者が多くなった。そのため、故郷のしきたりに従って、葬式の際に死者に「陰庫」（または「陰厝」、あの世で使う家、日本の華僑の間では「冥宅」と称す）を焼いて送ることができず、普度の際に、紙師に作ってもらい、普度期間中供え、最終日に、神々に供えた紙細工と一緒に焼くようになった。普度は生者と死者がコミュニケーションできる場であり、普度であの世の神霊に供えた紙細工を最後に焼いて送るのも、故郷の葬式で死者に「陰厝」を焼いて送ればあの世での住家になる、と信じられているのと同じ発想に立っているのである。

1986年、福清で長年紙師として伝統祭祀にかかわってきた王良清氏は、神戸の老華僑に招かれ、神戸の普度の紙細工や冥宅などを担当するようになった。以降、神戸の普度は少しずつ故郷のそれに倣って変化した。ただ、依然として新老華僑の間には、異なる気候、風土、及び社会的、文化的環境の中で形成した、各礼儀作法が持つ意味などに対する理解

<sup>9</sup> 2014年2月に神戸で行った王良清氏への聞き取りによる。

<sup>10</sup> 京都宇治萬福寺公式HP、2015年3月27日最終閲覧。

や解釈の違いが見られる。

### 3. 新華僑の来日と新たな福清人の活躍

#### (1) 福清新華僑の来日ルート

福清華僑の来日ルートは時代によって異なるが、中国政府が私用による出国を許可するようになった1986年以前、密航は別として、戦後日本に入国した中国人のほとんどは、直截な血縁関係を頼りにしたものである。神戸在住の福清華僑を中心とした調査を通して確認できたのは、以下の五つのタイプである。

①終戦前後から1947年の外国人登録令（勅令第207号）が実施されるまでの間、外国人の入国がまだ許されており、終戦後の混乱期に日本にいる親族を頼って渡ったもの、

②外国人登録令の後でも、香港経由で日本に入国したケース<sup>11</sup>、

③1970年代初め、中国政府が行った帰国（愛国）華僑及びその配偶者と子女による出国申請の許可によって来日したもの、

④1979年改革開放政策の実施に当たって、海外華僑からの投資の見返りとして、彼らの故郷に残されている家族の海外移住を許可した。これに伴い、1970年代に数多くの人が福建省と広東省から華僑の家族（僑眷）、特に子女や孫として、香港に移住したり香港経由で日本を含む海外に渡ったもの、

⑤戦前日本国籍を取得した帰国華僑とその家族が、1960年代の日本政府による帰国政策の実施に伴って、日本に戻ったケース（許金頂・安井三吉2005）。

この時期に来日した華僑は、兄弟や父母が老華僑（または華僑と結婚した日本人）であり、たいていの場合は老華僑社会の一員として短期間で受け入れられ、福建同郷会の諸活動にも積極的にかかわっている。

中国政府による私用での海外渡航が許可された1980年代半ばは、海外華僑による故郷への投資、及び学校建設などの寄付行為が盛んな時期でもあり、またより多くの福清人が一攫千金の夢を抱き、親戚、あるいは同郷人の繋がり、海外移住した。その名目は留学が最も多く、来日の際の保証人は老華僑であることが多かった<sup>12</sup>。ほかにも、老華僑経営の中華料理店の料理人として、技能ビザを取得して来日したケースや、帰郷した老華僑（の子孫）との婚姻によって来日したケースなど様々である<sup>13</sup>。いずれのケースにおいても、福建出身の新華僑は、来日の準備段階から日本への移住・定住まで、程度の差こそあれ、老華僑との血縁的、地縁的結びつきを有効に利用しているのが特徴であろう。

#### (2) 福清新華僑の日本での分布

表1にあるとおり、中国人登録者総数に占める福建出身者の割合は、新華僑が大量に流入してきた1990年代以降も、一貫して9%前後を維持している。また、彼らの日本での居

<sup>11</sup> インタビュー調査で確認されたが、その詳細はさらなる調査を要する。

<sup>12</sup> 筆者が2015年2月に実施した、同人聯誼会及び福建同郷会の新華僑会員（有効回答者21名）を対象とするアンケート調査によれば、彼らが来日の際の保証人は、6人が日本人で、その他の15人は、老華僑になってもらった。

<sup>13</sup> 2014年4月及び8月に、神戸在住の福清華僑を対象とする聞き取り調査による。

住

表1 福建出身者の主な居住地域及び人数 (単位:人)

	人数	日本全国	東京	神奈川	埼玉	千葉	兵庫	大阪	京都	長崎	愛知県
1985年	福建a	20059	8202	2429	1182	953	1468	1154	646	370	512
	全国b	218585	73494	19336	14538	10364	13102	17982	4910	1277	10036
	a/b×100	9.18	11.16	12.56	8.13	17.33	11.2	6.42	13.16	28.97	5.1
1999年	福建a	23554	9597	3198	1337	1196	1526	1719	543	323	517
	全国b	272230	77513	22541	17337	14657	13970	24782	5796	1761	12967
	a/b×100	8.65	12.38	14.19	7.71	8.16	10.92	6.94	9.37	18.34	3.99
2001年	福建a	27522	11152	3913	1580	1649	1814	1794	532	318	584
	全国b	335575	92142	27057	21197	18947	15710	27672	6939	2233	15831
	a/b×100	8.2	12.1	14.46	7.45	8.7	11.55	6.37	7.67	14.24	3.75
2008年	福建a	47540	16579	7811	3354	3199	3531	3662	497	476	1189
	全国b	606889	133108	46750	39202	36724	23456	45885	10744	4039	41605
	a/b×100	7.83	12.46	16.71	8.56	8.71	15.05	7.99	4.63	11.79	2.86
2000年	福建a	53699	18527	9559	4060	3687	3726	3831	482	602	1258
	全国b	655377	144469	51709	40411	41125	24760	40155	11107	4317	46167
	a/b×100	8.19	12.82	18.46	9.35	8.97	15.05	7.96	4.34	13.94	2.71
2010年	福建a	61896	21654	11313	4971	4484	4069	4067	512	781	1377
	全国b	680518	156844	55095	46556	44458	25726	49946	11429	4459	47099
	a/b×100	13.5	13.8	20.53	10.68	10.09	15.82	8.14	4.48	17.52	2.92
2011年	福建a	64344	23445	11903	5692	4635	4051	4225	549	609	1503
	全国b	687156	164201	56095	48419	45427	25585	51056	12005	4037	47454
	a/b×100	9.36	14.28	21.22	11.76	10.2	15.83	8.28	4.57	15.09	3.17
2012年	福建a	64028	23911	11888	5915	4634	3934	4381	616	473	1563
	全国b	674879	164424	55362	47816	43581	25253	52392	12459	3598	47313
	a/b×100	9.49	14.54	21.47	12.37	10.63	15.58	8.36	4.94	13.15	3.3

出典: 入管協会『在留外国人統計』平成7-24年版より作成。

地も、かつての集中居住地だった長崎や、神奈川及び兵庫のような旧開港地に限定せず、東京、大阪などの大都会にも広がっている傾向がある。さらに、在日中国人総数に占める福

建出身者の割合を合わせてみると、東京都や神奈川県を中心とする首都圏と、関西地域、特に兵庫県・大阪府の二大地域に集中している。対して、同じく中国人登録者数が上位の愛知県を中心とする中部地方には、福清出身新華僑が少ない。この要因として、第一に、福清出身者は、老華僑との地縁的血縁的紐帯を頼りに来日し、これらのネットワークがある横浜と神戸を中心とする地域に居住する傾向があること、第二に、福清出身者のほとんどが、「出稼ぎ」という経済的理由で来日したため、商機の多い都会に自然的に集中することになるが、その中で特に、中国の寺廟及び中華学校などがある横浜と神戸とその周辺が、宗教心の篤い福建出身者を引き付けていること<sup>14</sup>、以上の2点がこのような分布の特徴を生み出しているものと推察される。

### (3) 出身地福清への文化的執着と同郷意識

中華人民共和国による一連の文化政策により、中国の多くの地域では、有形及び無形の伝統文化が禁止され、仏教、道教及び多くの民間信仰が人々の生活から遠のいていった。しかし、福建省はかつてから宗族などが発達していた地域であり、儒教的道徳規範のみでなく、祖先祭祀などにかかわる仏教や道教及び民間信仰の融合した礼儀作法が一貫して重要視されてきた。文化大革命後も、海外華僑への配慮からいち早く宗教の復活を認められ

<sup>14</sup> 横浜関帝廟(2012年6月)と神戸関帝廟(2014年2月)での参与観察と聞き取りによれば、参拝者の多くは福建出身者と台湾出身者である。また、2015年2月に行われた神戸在住の福清出身新華僑へのアンケート結果によれば、21名中18名は普段関帝廟を利用していることが分かった。



たため、他地域出身の新華僑と比べ、福建出身者の信仰心は篤く、また出身地の伝統文化への執着が強いように思われる。横浜中華街や神戸の関帝廟には、旧暦で毎月の朔日と15日（地域によっては2日と16日）に、福清出身の華僑の参拝者が大勢やってくる。商売を営む人間が多く、関帝廟での定期参拝以外でも、商売を始める前の「許願」（願掛け）及び成功した後の「還願」（願ほどき）を盛大に行う者<sup>15</sup>も少なくはない。

2015年に行った、同人聯誼会及び福建同郷会に所属する新華僑計21名を対象としたアンケート調査においても、殆どの新華僑が神戸関帝廟に日常的に参拝していることが確認された。また2014年8月に神戸関帝廟で行われた普度法会においては、縁金（寄付金）を除いて、諸神霊に送るための紙銭（「あの世」で使うお金）や線香などの祭祀用品の購入代は1～3万円、あるいは3万円以上の方が殆どで、2～3000円しか購入しない老華僑とは対照的である。新華僑の篤い信仰心と経済的余裕がうかがえる。

こうした他地域出身の新華僑は見られない出身地の信仰や文化に対する帰属意識から、福清新華僑は、比較的強い同郷意識を持っているように思われる。

#### （４）福清華僑の定住化と組織団体の結成

現在、1980年代後半から1990年代に来日した福清華僑は、帰国した一部の人々は別として、殆どの人は日本での永住資格あるいは日本国籍を取得し、家族で安定した生活を送っている。それを背景に、日本各地で福清出身者による文化的・経済的組織や団体が設立されている。例えば2011年に、会員間そして福建と日本の間の文化、経済などの分野における交流を支援、促進することを目的として日本全国規模の日本福建文化経済促進会（非営利任意団体、現会長廖赤陽）が東京を本部に設立した。同じく2011年に、大阪では、会員間の情報交換や日本企業への福建出身留学生などの人材紹介などを目的とした100名以上の会員を有する融僑会（代表、何融誕）が設立された。次章で述べる神戸の同人聯誼会も、2011年に、会社経営者である数名の福清華僑によって立ち上げられ、現在37世帯の会員を有する親睦団体となっている。

これらの団体は、日本福建文化経済促進会こそ華僑らのトランスナショナルな経済的活動を円滑に進めるための合理主義的戦略の一つと捉えられるが、その他は、むしろ日本で生活していくうえで、子女の教育や地域社会との関わり方等、日常生活で起こりがちな問題の対処法や情報の提供などの性質が強い。同じ出身地（文化）や方言をベースとした強い連帯感が、定住志向の強い福清出身の新華僑を支えているのである。ただ、老華僑のように、寺廟や学校そして墓地などの施設を一から建てることは新華僑には不可能であり、老華僑の既存施設を利用させてもらうために、歩み寄ることの必要性を感じた新華僑が、行動を起こしたのである。

## 4. 同人聯誼会と普度

2008年のリーマンショック<sup>16</sup>をきっかけに、同郷者間の相互扶助団体設立の構想が出され

<sup>15</sup> 福清では、個人の出資によって寺廟で行ったこれらの祭祀活動を「個人普度」と言われ、多くの場合は「普度」と略す。

<sup>16</sup> 2008年9月15日、アメリカの5大投資銀行の一つ、リーマンブラザーズが突如経営破綻したのをきっかけに、先進国の金融システムは信用の喪失によって全面的に麻痺し、資金の流れが途絶するという金融

た。2011年に、李琛を中心とする数人の新華僑が発起人となって、同人聯誼会が設立された。会長李琛以下、理事長の王華銀をはじめ陳雅華など7人の理事が選ばれた。2015年2月現在、同人会の会員は、37世帯100人以上である。定期的に食事会や家族旅行などを催したり、会員間の相互扶助と親睦を、同人聯誼会の主な目的としている。2012年夏より、神戸福建同郷会から普度への協力を要請されたのを機に、普度期間中の精進料理の提供や材の買い付けなどを会がボランティアとして引き受けた。5日間にわたる普度期間中、主に料理店経営のメンバーらはシフトを組んで自分の店や会社を休んで、手伝いにくる。翌2013年には、神戸中華会館主催の中秋名月祭にも料理を提供するようになったが、これもほぼ利潤なしの活動である。これらの活動を通して、「私欲が強い」「公共意識がない」などといった、新華僑に対する誤解やステレオタイプを払拭すると同時に、福清人、中国人として、故郷の伝統を大事に受け継ぐ同じ「仲間」であることを認めてもらいたいという新華僑側の意図を垣間見ることができる。2014年の普度法会の手伝いには、同人聯誼会のメンバーらは、会の名称が印刷されたポロシャツを着て臨んだことから、新華僑としての立場を鮮明に表明したい意図が伺える。

同人聯誼会が他の新華僑団体と異なるのは、そのメンバーの大半が、何らかの形で老華僑との血縁的（姻戚）関係にあることである。こうした「一族（親戚）である」という同族意識に、同じく「福清人」という共通の出身地意識も加え、新華僑が「ごく自然に」老華僑から信頼され、頼られる存在になったのではないかと考えられる。以下では、数人の事例を通して、老華僑との血縁、地縁的つながりが新老華僑の接近した経緯について検討する。

### （1）李琛と有煥、有泉

李琛の祖父、李有泉は、1916年に福清県（現在の福清市）北垞后厝村に五男として生まれた。五人兄弟は、上から順に友枝、友漢、友釗、友煥、友泉<sup>17</sup>と言い、三番の友釗を除いて来日経験がある。このうち日本に定住したのは、四番の有煥と五番の有泉の二名であった。

有煥<sup>18</sup>（1909年生）は、1930年頃に来日し、終戦まで神戸、根室、美作を転々と行商していたが、戦後姫路に移り、衣料品店、パチンコ、中華料理など様々な商売を展開し、財を成した。有煥は1936年福清出身の女性と結婚し、9人の子ども（8男1女）を授かった。現在でも、有煥の子女及び孫らの殆どが姫路に居住しており、大きな一族となっている。

一方有泉<sup>19</sup>は、来日の時期こそ定かではないが、戦前上海で商売をしていて、福清の故郷には妻と二人の子ども（1男1女）が住んでいた。1946年に神戸在住の福清華僑游氏宅にしばらく逗留していた。戦後の混乱期に一人で来日したものと推測される。数年後、兄の有煥と共同で姫路でパチンコ店経営するなど、徐々に経済的基盤を築き上げていった。この間、神戸在住の日本人女性と結婚し、新たな家族を作った。

有煥は、1959年神戸中華同文学学校の校舎建設の際に多額の資金を寄付し、有泉も神戸福

---

危機が勃発した。

<sup>17</sup> 名前の真ん中の字は、故郷の者は「友」を使うが、日本にいる者は「有」を使っている。

<sup>18</sup> 有煥の情報は、2014年8月23日に、有煥の子息の家富、家昌氏への聞き取りによる。

<sup>19</sup> 有泉については、2014年4月、8月と2015年2月、李琛氏と李家昌氏へ聞き取りを行った。

建同郷会副理事長や普度の総経理などの公的役職も任された。兄弟とも福清出身華僑の間では名の知られていた人物であった。

一方、李琛の父と伯母と李琛の祖母はずっと福清北垵后厝村に暮らしていた。1963年に李琛が生まれてまもなく父は亡くなった。李琛には一歳年上の姉がいたが、母は祖父有泉からの送金で二人を育てた。1979年、有煥と有泉が福清に投資した見返りに、李琛一家の海外移住が許可された。当時李琛16歳、移住先は香港だった。1984年、香港で高校を卒業した李琛は、祖父有泉の兄有煥を保証人に来日した。

李琛は日本語学校で学んだ後、大阪産業大学に進学して経営を学んだ。1989年、大学卒業後、二世の華人女性（安徽省安慶出身）と結婚し、在学中からアルバイトしていた祖父のパチンコ屋を手伝っていた。1991年、有泉が他界したのを機に李琛は香港に戻り、貿易会社を興した。

最初は、江蘇省などで加工した衣類を、日本に輸出する仕事をしていて、1995年から、川砂を中国から日本に輸入することに変更し、1996年に神戸にも会社を作った。1997年、妻と娘たちを連れて神戸に移住した。拠点を日本に移し、川砂の商売をしているうちに、李琛は、港や船舶関係の会社とのやり取りが密となり、関連知識を深め、2004年に、親戚や同郷の仲間の出資を集めて、船舶の投資をはじめた。さらに、内モンゴルや福州にも会社をつくったが、殆どの業務を中国の会社に任せている。現在李琛は、神戸にある順興通商に常駐し、不動産を経営している。

李琛一家は最初の頃、福建同郷会の近くに住んでいたこともあり、よく遊びに行っているうちに、「有泉の孫」としてすぐに受け入れられ、1998年に同郷会に入会した。当時福建同郷会の理事長や理事の多くは、有泉、有煥と親交のあった老華僑であった。

李琛は二か月に一回、帰郷して北垵村に住んでいる母に会っている。一族の墓（祖墳）は后厝村にあって、2000年前後、李琛とそのいとこ（李姓）が協力して、墓の修繕を行った。さらに、毎年の新年、清明節及びお盆に定期的に有泉の墓がある神戸中華義荘へ墓参りに行っている。また、船舶の仕事始めて以来、毎年の起業日である5月初めに、会社の主要メンバーを7、8名連れて、湄州島の媽祖廟祖廟への参拝も行う。媽祖廟では、海上の女神として篤い信仰を集めている媽祖（天妃）が主神として祀られており、特に湄洲島にある祖廟は、中国内外の信者で常に賑わっている。李琛らは、直径が40-50センチある爆竹や大量の線香を買っていき、廟で祈願する。これは、福清ではごく普通のやり方であるという。また神戸と京都の普度のどちらにも参加し、縁金を出している。普度そのものへの信仰よりは、祖父の人脈を維持するためであるように思われる。

李琛は、神戸は自分の最後の故郷であるという。香港は、五年間しか住んでおらず、自分の人生のなかでは「過渡」の地（中継地）のようには思えない。一方、生まれの故郷である后厝村には、李一族のほとんどが日本または高山市に移住したため、大伯公（祖父の一番上の兄）の二番目の息子など数人しかいない。ちなみに福清から日本に新たに来日した李琛のいとこは、100人を超えており、姫路にいる有煥の子孫を加えると、数百人の規模となる。李琛が来日後に知り合った同じ高山地域出身の新華僑も数多くおり、神戸は名実ともに彼の拠点となっている。

こうして、堅実な経済力に、新老華僑ともに持つ広い人脈がために、2011年同人聯誼会の設立の際に、李琛は会長として選ばれた。李琛にとっても、祖父の有泉と四伯公の有煥

が築いた老華僑ネットワークを維持することも、同じ福清の言葉を操り、故郷で少年時代をともに過ごした記憶を共有する新華僑の仲間との絆を保つことも、重要であった。こうした新老華僑の橋渡しの役割を果たすという李琛の考えは、老華僑と何らかのつながりを持つ同人聯誼会のほかのメンバーからも支持された。

## 2) 同人聯誼会のメンバー

同人聯誼会の会員は、それぞれ違う時期に違うルートで日本に移住し定住するようになったが、李琛との関係から、彼と血縁的につながっているいとこたちと、地縁的につながっている福清出身の友人（とその親戚や友人）の二つに大きく分けられる。

1980年代以降福清から日本に移住した李琛のいとこは、兵庫県だけでも60人以上おり、彼らの家族も入れれば、数百人となる。同人聯誼会の会員にも、7人ほどいる。李琛の祖父の三番目の兄友釗の孫娘、李雅清<sup>20</sup>もその中の一人である。

雅清は1969年に北坨后厝村に6人兄弟の四番目として生まれた。1982年彼女が13歳の時、兄弟6人は福州に移り、5年後、有煥の呼び寄せで神戸に移住した。のちに、いとこの進華（同じく友釗の孫）の同級生で、広東出身の三世華僑と結婚し、男の子2人をもうけた。結婚後しばらくの間、雅清は家事と育児に忙しく、外との繋がりも少なかった。

2008年に、慕っていた姉ががんを患って他界し、雅清はあまりのショックでいっそう家に引きこもりがちとなった。2013年に、はじめて関帝廟で行われた普度に参加し、姉に紙金を焼いて送った。そして、2014年の8月、さらに冥宅を供えて姉の霊を供養した。「信仰こそもっているものの、やり方などは、最初はわからなかった。お香の焚き方だって、姉が関帝廟に連れてきて教えてくれたもの。」と語った雅清は、2013年に初めて普度に参加したとき、亡くなった家族に冥宅を供えた老華僑を見て、「自分の姉にも」とまねたのである。

二人の息子は日本の学校に通っており、数年前に一家そろって日本国籍を取得した。神戸は夫と息子たちの生まれ故郷であり、自分がここに根を下ろさない理由はない。李琛同様、雅清も、出身地の北坨后厝村より、三十年近く住んでいる神戸を故郷のように思っている。2014年の夏に普度で姉の霊を供養する際に、手伝いに来ていた同人聯誼会のメンバーとすっかり打ち解け、その後、同人聯誼会に正式に入会し、夫や子供たちを連れて、会の様々な活動に積極的に関わるようになった。李琛など数名のいとこ以外にも、姉と親交のあったメンバーは多数おり、同人聯誼会は、雅清にとって福清方言を話し、福清人としての意識を持てる数少ない空間を提供している。

1975年に高山の龍尾村に生まれた劉明は、同人聯誼会の理事の一人である。親戚の中に老華僑はいなかった。1990年代初めに、従兄弟たち（父の兄弟の子ども）はこぞってインドネシアに出稼ぎに行ったが、小さい頃から日本に関心を持った劉明は、留学生として1998年に来日した。2000年にベトナムの華人が経営する料理店で働いているうちに、その娘と知り合い結婚した。義父一家は日本国籍を取得したが、劉明は「中国人としてのプライドを捨てたくないから、永住資格のままがいい」という。近年、インドネシアにいる従兄弟たちと共同出資で商売を展開し、大きな利益を手に入れた。それと同時に、神戸の繁華街で数軒の料理店や不動産を経営している。

---

<sup>20</sup> 李雅清氏には、2014年8月22-25日神戸関帝廟で行われた普度法会、2015年2月7日の福建同郷会新年会で、聞き取りを行った。

劉明の親やその兄弟たちは龍尾村にいるため、毎年清明節に劉明は必ず墓参りに帰国している。2012～14年の三年間、閩帝廟の普度で、亡くなった義母のために、毎年冥宅を供え、焼いて送っていた。故郷のやり方とは異なるが、「神戸華僑」のやり方で気持ちを表したいという。

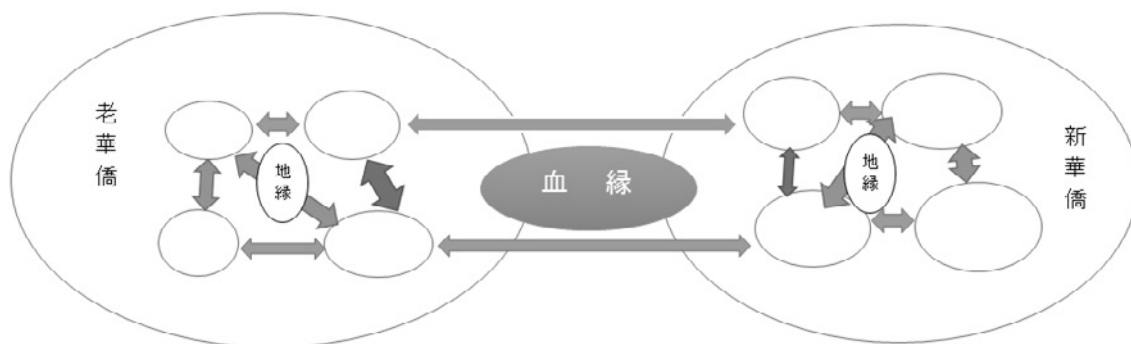
劉明は、福建同郷会だけでなく、中華会館の運営にも意欲を示している。「新華僑と老華僑の交流を促進したい。普度や中華学校のような老華僑が残した伝統を、新華僑が受け継いでいく必要がある」と考えているようである。

同人聯誼会の理事長王華銀は、1968年に三山官路村に生まれ、1980年代後半、神戸で商売をしていた親戚である老華僑 M の招聘で来日した。数年後いったん帰国したが、神戸滞在中知り合った女性（現在の妻）と結婚して2000年に再び来日した。妻の母方の祖母は福清出身の華僑と結婚した日本人であり、福清でずっと暮らしていたが、1980年代に「残留婦人」として家族を連れて神戸に戻った。王華銀が再来日後、まず横浜などで商売をした。2008年に家族で神戸に移り、李琛と知り合って意気投合した。王華銀には、M 以外にも数名の老華僑の親戚がいるが、自分はやはり価値観も習慣も違う「新華僑」だと意識している。比較的時間の調整が自由な王は、普度期間中、毎朝食材の買い付けに行き、昼間は厨房の人員管理などに当たっている。「最初は手伝いに来た人に、謝礼を出すと同郷会から言われたが、あえて断った。新華僑のマイナスイメージを払拭したいから」という。実際、王華銀は自宅に閩羽像を祀って、毎月の朔日と十五日に果物などを供えて祭祀を行う。また、商売を始める前と成功した後に、故郷で盛大に個人普度を行った経験があるという。信仰心が篤く、故郷の伝統に強い関心を抱いていることが伺える。

## 5. 血縁、地縁紐帯の広がり

以上、三人の事例を挙げたが、総じて言えば、同人聯誼会のメンバーは、①生活及びビジネスの拠点を神戸におき、神戸で定住する意思が強いこと、②故郷の文化を受け継ぎたい一方、老華僑が維持してきた伝統も尊重し、重用視していること、③同人聯誼会を、故郷の方言、信仰あるいは人間的つながりなど、出身地に関する身体的記憶を共有する者同士の交流の場として見なしていること、などの共通点を持っている。そして何より、老華僑との血縁的、地縁的つながりを持っている。

図1 新老華僑相互接近イメージ図



かつて、老華僑の海外移住・定住からビジネスや子女の結婚まであらゆる面で機能して

いた血縁、地縁的紐帯は、教育水準が高まり、交通・通信網などが発達している今日の新華僑にとっては、それほど重要ではなくなった。しかし、「血のつながった一族である」という同族意識、そしてともに経験してきた故郷の記憶、方言などの同郷意識は、容易に新華僑と老華僑を個人レベルと集団レベルの両面から接近させ、より広範で強固なネットワークを形成していった。また、集団としての新老華僑をつなげるのに大いに役立ったのが、まさに、李琛をはじめとする同人聯誼会のメンバーのように、複数の個人が持つ老華僑との血縁関係である（図1）。

近年、同じく老華僑の主要移住地であるシンガポールにおいても、新しく移住してきた新華僑の団体と従来の老華僑団体の間に、会員を受け入れ合うことやイベント開催の相互協力などの連係が見られたと報告されている（劉文正 2014）。同じ種族、文化アイデンティティを持つ新老華僑は、互いの長所を吸収することによって、移住地での生活、ビジネスをよりよく改善していくという意図において、日本の華僑もまた同様である<sup>21</sup>。しかし、中国語スピーチコンテストの共催など、広義の、しかも新中国成立後の宗教的要素抜き「中華文化」の発揚を目的とするイベントと、自らの価値判断や行動規範となる信仰に基づいたローカルな出身地文化の継承とは、その性質や意義が大きく異なる。従来の老華僑による団体組織の多くは、故郷の保護神の祭祀や普度のような宗教行事の挙行など彼らの出身地文化の維持を目的に設立し、維持されてきた。これらの団体は、同じ血縁と地縁紐帯によって結び付けた者のみに開放する一方、その他を排除してきた。神戸における福清出身の新老華僑が互いに歩み寄ることができたのは、確かな父系出自または姻戚関係と、ともに出身地文化の継承に意欲的であったからである。したがって、かつての福清華僑が移住・定住の際に中心的役割をはたしてきた血縁、地縁紐帯は、新たな華僑の参入によって受け継がれることによって、今日でも出身地文化の継承や集団内部の関係調整及び外部との利害的交渉などにおいて機能しており、「福清人」の意識形成・維持に大きく影響する要素であると言える。

## おわりに

以上、福清出身の華僑に焦点をあて、それぞれ老華僑と新華僑の移住・定住における血縁、地縁紐帯の役割および新老華僑が歩み寄る背景と要因について考察を試みた。

日本全国に分散して居住せざるを得なかった一世の老華僑は、普度や姻戚関係などを通して、同族・同郷間の結束を強めながら異郷で生存する基盤を築き上げた。また、日中戦争や戦後の華僑運動を経験した二世華僑は、民族的文化的中国人アイデンティティの一部として、福建出身者の全国的組織を立ち上げ、「福清人」意識を明確なものにしていった。こうした老華僑の強い同族・同郷紐帯に基づいた老華僑社会は、2000年代前後、後継者不足のため存続の危機に直面した。そのような折、1980年代前後から来日した新華僑が老華僑の伝統行事にかかわることによって、老華僑に接近した。その結果、従来の老華僑社会は継承されてゆく文化のみでなく、華僑社会そのものの内部構成も大きく変わろうとしている。

---

<sup>21</sup> 中華学校における教育や中華文化の継承において新老華僑が融合する可能性について論じた（張玉玲 2003）をご参照いただきたい。

同じく福清出身の新華僑は、その多くが多少なりとも老華僑と血縁（姻戚）関係にあること、また、自身も福清の出身地文化（宗教など）に強い帰属意識を持っている。他地域出身の華僑には見られないこの血縁地縁紐帯による新老華僑の歩み寄り、これまで見てきたように、諸歴史的、政治的要素に左右されたあるいは福清華僑独自の現象かもしれない。しかしながら、新華僑は、老華僑が受け継いできた普度などの出身地文化は故郷福清のそれとは大きく異なっているものであることを認識し、そのうえで受け入れようとしているのである。それは、自分たちの子孫もいずれ日本社会へ同化してしまうという現実の前で、老華僑によって伝承されてきた有形（同郷会館や関帝廟など）及び無形（普度や清明節など）の中華文化を、中国人アイデンティティを保つための拠り所として日本社会で暮らしていくことを新華僑が決めたことによると見て良いのではないか。したがって、同人聯誼会を中心とする新華僑が普度などの伝統行事に加わり、同郷会などに入会するなど華僑社会の在り方に強い関心を示すのは、移民としての新華僑コミュニティの成熟によりもたらされた必然的結果であるとも言えよう。

福清華僑の血縁、地縁紐帯に基づくネットワークは、今後、華僑社会全体でどのように機能していくのか、また、教育、福祉など様々な面で日本社会との交渉が多くなる新華僑のエスニシティの今後の変容に、注目していく必要がある。

## 参考文献

### 〔日本語文献〕

- 中華会館編 2013 増訂版『落地生根：神戸華僑と神阪中華会館の百年』研文出版
- 過放 1999『在日華僑のアイデンティティの変容-華僑の多元的共生』東信堂
- 茅原圭子・森栗茂一 1989「福清華僑の日本での呉服行商について」『地理学報』27、pp17-44
- 鴻山俊雄 1979『神戸大阪の華僑』華僑問題研究所
- 廖赤陽 2003「在日中国人の社会組織とそのネットワーク-地方化、地球化と国家」游仲勳先生古希記念論文集編集委員会『游仲勳先生古希記念論文集』風響社、pp277-296
- 林同春 1997『華僑波乱万丈私史 橋渡る人』エピック
- 劉文正 2014「シンガポールにおける新移民社団試論」（林松涛訳）清水純ほか編『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社、pp337-372
- 小木裕文 2001「僑郷としての福清社会とそのネットワークに関する一考察」立命館国際研究 14(1)、79-89、pp2001-06
- 潘宏立 2002『現代東南中国の漢族社会-閩南農村の宗族組織とその変容』風響社
- 日本華僑華人研究会編 2004『日本華僑・留学生運動史』日本僑報社
- 清水純ほか編 2014『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社
- 曾士才 1987「在日華僑と盆行事-移民社会における伝統行事の機能と変容」『民俗学評論』27、pp40-70
- 曾士才 1995「在日華僑の社会組織と宗教行事：宇治萬福寺での盆行事」『宗教ネットワーク：民俗宗教、新宗教、華僑、在日コリアン』行路社 pp189-240
- 谷垣真理子ほか編 2014『変容する華南と華人ネットワークの現在』風響社

- 張国楽 2006 「一九二〇・三〇年代における在日福清呉服行商の実態と動向：福益号を通じて」『歴史研究』4、pp1-44
- 張国楽 2010 「一九二〇・三〇年代における在日福清呉服行商の実態と動向」 pp1-34
- 張玉玲 2003 「『中華文化』の継承と『新』『老』華僑の融合-在日華僑の役割変化に注目して」櫻井龍彦ほか編『変わる中国変わらない中国』全日出版、pp353-391
- 張玉玲 2008 『華僑文化の創出とアイデンティティ-中華学校、獅子舞、関帝廟、歴史博物館』ユニテ
- 内田直作 1949 『日本華僑社会の研究』同文館
- 渡辺欣雄 1991 『漢民族の宗教-社会人類学的研究』第一書房
- 許金頂・安井三吉 2005 「神戸福清華僑の国内親族調査」『阪神華僑の国際ネットワークに関する研究』（平成14-16年度科学研究費補助金（基盤A(1)）研究成果報告書）pp235-254
- 許淑真 1989 「日本における福州幫の消長」撰南学術、pp59-77
- 許淑真 1990 「日本における労働移民禁止法の成立：勅令第352号をめぐって」松田孝一編『東アジアの法と社会』汲古書院、pp18-48
- 山下清海 2010 「福建省福清出身の在日新華僑とその僑郷」『地理空間』3(1)、pp1-23
- 山下清海編著 2014 『改革開放後の中国僑郷-在日老華僑・新華僑の出身地の変容』明石書店
- 山田信夫編 1983 『日本華僑と文化摩擦』巖南堂出版

#### 〔中国語文献〕

- 小木裕文 2015<全球化与中国新移民:以福建省福清侨乡为例>《小木裕文教授退職記念論集 立命館国際研究》27(4)、pp793-802
- 王维、廖赤阳 2007<在日福清移民的社会组织及其网络:以福建同乡会的活动为焦点>刘宏《海洋亚洲与华人世界之互动》华裔馆
- 张玉玲 2014<在日華僑同乡意识的演变:以福清籍华侨的同乡网络为例>《华人研究国际学报》第六卷第二期、pp27-52

#### 〔資料〕

- 福清市志編纂委員会・福清市委党史研究室編 1994 『福清市志』厦門大学出版社
- 神戸福建同郷会 1998 『神戸福建同郷家族名簿』
- 神戸福建同郷会 『郷友』（年刊、1972-1981年各期）
- 旅日福建同郷懇親会編集部編 1982 『旅日福建同郷懇親会 二十年の歩み』
- 旅日福建同郷懇親会半世紀の歩み編集委員会編 2013 『旅日福建同郷懇親会 半世紀の歩み』

(ZHANG YULING/山口県立大学)